明治時代の米子城下町

米子城下町の構造

米子城および城下町の構造は、湊山山頂の本丸を中心に、内膳丸、二の丸、三の丸などの郭が配置され、さらに内堀と外堀に囲まれた範囲に武家屋敷が建ち並んでいました。そして、外堀沿いには町人町がL字形に配置されていました。

米子の町は、侍の住む町を(ちょう)、町人町を(まち)と呼んで区別していましたが、外堀の中にあった内町(うちまち)は、武家屋敷の中にあった町人町でした。

米子城下町は、鳥取池田氏の家臣の荒尾氏が治めていましたが、米子は武士の人口が少なかったため、江戸時代の後期には多くの武家屋敷が取り壊されて水田へ替えられたことが絵図からわかっています。武家屋敷と水田が混在している風景は、米子城下町の特徴といえるでしょう。

米子城下町の構造図

織部焼と志野焼

下駄

木簡

かんざしとこうがい

地でられた炉の貝殻

出土品した遺物の数々

米子城跡から出土した特殊な遺物に木簡があります。木簡とは、木を薄く割った板の両面に墨で文字を書いたもので、米子城跡では、これまでに40点以上出土しています。

これらの木簡に記載された魚介類の名前には「もろげえび」や「塩子鯛」など、当時食べられていたものが書かれており、当時の武士の食生活の一面を窺わせる貴重な資料です。

また、織部焼や志野焼などの高級陶器類、かんざしや下駄、アカガイの貝殻など多種多様な遺物が出土しており、さながら、地下に埋もれた博物館の様相を呈しています。

米子城関連年表

応仁1年(1467)～応仁の乱　米子館山に山名宗之が砦を築く。
大永4年(1524)　5月　尼子経久伯耆に侵入　米子城、淀江、尾高などの城を攻め落とす。
永禄5年(1562)　毛利元就の富田攻め、因幡、伯耆へも進出。
永禄9年(1566)　富田城陥落。山陰地域は毛利支配下に入る。
元亀2年(1571)　尼子氏再興運動、尼子勝久・山中幸盛因幡・伯耆へ侵攻。
天正6年(1578)　尼子勝久上月城で自刃　尼子氏滅ぶ。　この頃の米子城跡は古曳吉種。
天正9年(1581)　鳥取城落城、秀吉が伯耆一円を支配。
天正13年(1585)　秀吉と毛利輝元の和睦　八橋以西の伯耆三郡が毛利領となる。
天正19年(1591)　吉川広家、(吉川元春の三男)、吉川家の家督を継承。
吉川広家が秀吉から西伯耆、出雲、備後など12万石を認知され、富田城に入るが、居城を米子に変え、山県九左衛門を奉行として築城開始。

文禄1～慶長3年(1592～1598)
文禄慶長の役(朝鮮出兵)　吉川広家従軍。
古曳吉種は朝鮮で討ち死(1592)。慶長3年8月、秀吉死す。
吉川広家、富田城に帰り、湊山築城を監督、米子港、深浦港整備。
慶長5年(1600)　関ヶ原合戦　吉川広家西軍として出陣。
吉川広家、周防国岩国(3万石)に転封、この頃城は7割方完成。
駿河国府中城主、中村一忠(18万石)が伯耆国領主となり尾高城に入る。
慶長7年(1602)　中村一忠尾高城から完成した米子城に移る。
慶長8年(1603)　中村一忠、家老の横田内膳を宿殺(米子城騒動)。
慶長15年(1610)　中村一忠20歳にて死、　中村家は断絶。
岐阜美濃国黒野城主加藤貞泰、伯耆国会見・汗入郡6万石領主となり入国する。
元和1年(1615)　大坂夏の陣、豊臣氏滅ぶ。幕府は一国一城令を発布するも、米子城は保存と決まる。
元和3年(1617)　加藤貞泰、伊予国大洲に転封、
因伯領主となった池田光政の一族、池田由之が米子城預かり(3万2千石)となる。
元和4年(1618)　池田光政の死亡、子由成が米子城主となる。
寛永9年(1632)　池田光中、因伯支配(32万石)、家老荒尾成利が米子城預かりとなる。
寛永5年(1852)　四重櫓と石垣を鹿島家の負担により大修理。
慶応4年(1868)　明治維新。
明治2年(1869)　朝廷より米子城返上の命令あり。
明治5年(1872)　米子城山は土族八倉直人らに払い下げとなる。
明治6年(1873)　城内の建物類は売却され、数年後取りこわされる。

問い合わせ　米子市文化振興課　〒683-8686 鳥取県米子市東町161-2(市役所第2庁舎3階)
TEL 0859-23-5438　FAX 0859-23-5414　E-mail bunka@city.yonago.lg.jp

このリーフレットは、令和元年度に「市内埋蔵文化財地域の特色ある埋蔵文化財活用事業」を活用して作成しました。

米子城下ではどんなものを食べていたのか

米子城下に暮らした人はどんなものを食べていたのでしょうか。当時の侍の日常を記録した『荒尾成文家雲錦』には、様々な贈答品に関する記述があり、当時の侍の食生活の一端を窺わせます。

また、米子城下町からはたくさんの陶磁器が出土しています。これらの多くは食器として用いられたものですが、中でも肥前地方で焼かれた唐津焼と伊万里焼は、江戸時代を通じて盛んに輸入されていました。この他には、中国の景德鎮で焼かれた染付や、朝鮮の陶磁器、上野・高取焼、瀬戸・美濃焼、織部焼、志野焼、備前焼、越前焼、砥部焼など、日本各地の製品が出土しており、にぎやかな食卓の風景を想像することが出来ます。

また、陶磁器以外にも、瓦類、漆椀、木簡、下駄、かんざし、紅皿、硯、羽子板など、当時の人々が実際に使用していたものがたくさん出土しています。

米子城下から出土した陶磁器

発掘調査された城下町

米子城下町の発掘調査は、1988年から2019年まで50次を超える調査を実施しています。

これまでの発掘調査で、文献に記録の無い近世初期の武家屋敷の遺構をはじめ、陶磁器や木製品などの大量の遺物が出土し、米子市街地の地下には、江戸時代の遺構が良好に眠っていることが明らかとなっています。

発掘調査で明らかにされた城下町の姿は、絵図や文献の存在しない近世前期の様子を生々しく伝えてくれる第一級の資料です。

今では誰も分からない、米子城をとりまく謎の数々も、発掘調査によって解明する糸口が見つかるかも知れません。手掛かりの少ない米子城の歴史を研究する上で、考古学の果たす役割はますます大きくなっています。

米子城跡第33次調査

左の写真は、第33次調査で見つかった大型の礎石建物です。4間×5間以上の規模を持ち、建物の周囲(まわり)から志野焼の向付や備前焼の茶道具などが出土しました。中村氏の時代にトップクラスの侍が暮らした屋敷だったと考えられます。

本丸から見た米子市街

米子城と城下町の変遷

米子城は、室町時代の応仁の乱の頃に、飯山に砦が築かれたのが始まりと言われています。その後、天正19(1591)年頃に西伯耆の領主となった吉川広家によって本格的な築城が開始されましたが、関ヶ原の戦いの後に米子城主となった中村氏は、未完成だった城の完成を急ぎ、慶長7(1602)年には米子城に入城したと言われています。現在の街並みに残る道路などの痕跡は、吉川氏の城造りを受け継いだ中村氏の時代に完成したものと考えられています。

その後、加藤氏、池田氏の後に米子城預かりとなった池田家家老の荒尾氏によって米子は治められていましたが、中村氏の時代よりも大幅に侍の人口が減少したため、江戸時代の中ごろには城下町の中に水田が広がるという、特異な景観に変化しました。そして、明治維新後には、侍屋敷の多くが水田化したことが古写真写真からも窺えます。

米子の町は、大正時代以降に急速に都市化が進みましたが、戦前の建築物は江戸時代のものが程度そのままの状態で残されています。

武家屋敷の遺構

武家屋敷の遺構は、建物跡や井戸、溝などが見つかっています。武家屋敷の全体を完全に調査した事例が少ないのですが、母屋を中心に掘立柱建物が建ち並んでいる様子が分かっています。

また、米子城下は加茂川の旧河道上に造られているため、昔から水害が多く、水の処理には苦労したようです。米子商工会議所の建て替えに伴う調査では、大型の水路が見つかっていて、これは武家屋敷からの排水を流す悪水抜きと考えられています。また、井戸もたくさん見つかっており、水道の普及する以前は井戸水の確保が大事だったことが分かります。

米子城跡第1次調査

加茂川の下流域に位置する米子城下町では、たくさんの溝が見つかっています。近世後期に描かれた絵図との照合から、溝の多くは武家屋敷の境界を示す屋敷割の役目を果たしていたと考えられます。

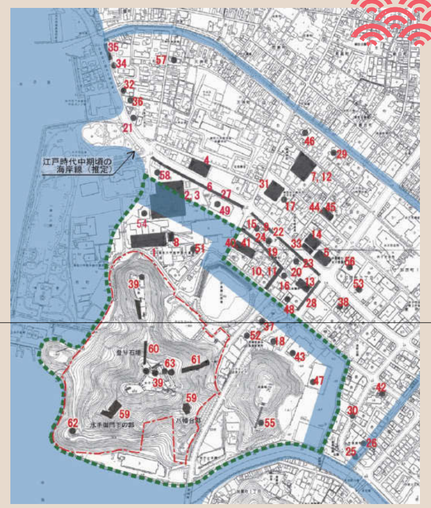
米子城跡第3次調査

武家屋敷の調査では、必ずと言ってよいほど、井戸が見つかります。左の写真は石組の井戸ですが、桶や曲物を井筒に転用した井戸も見つかっています。

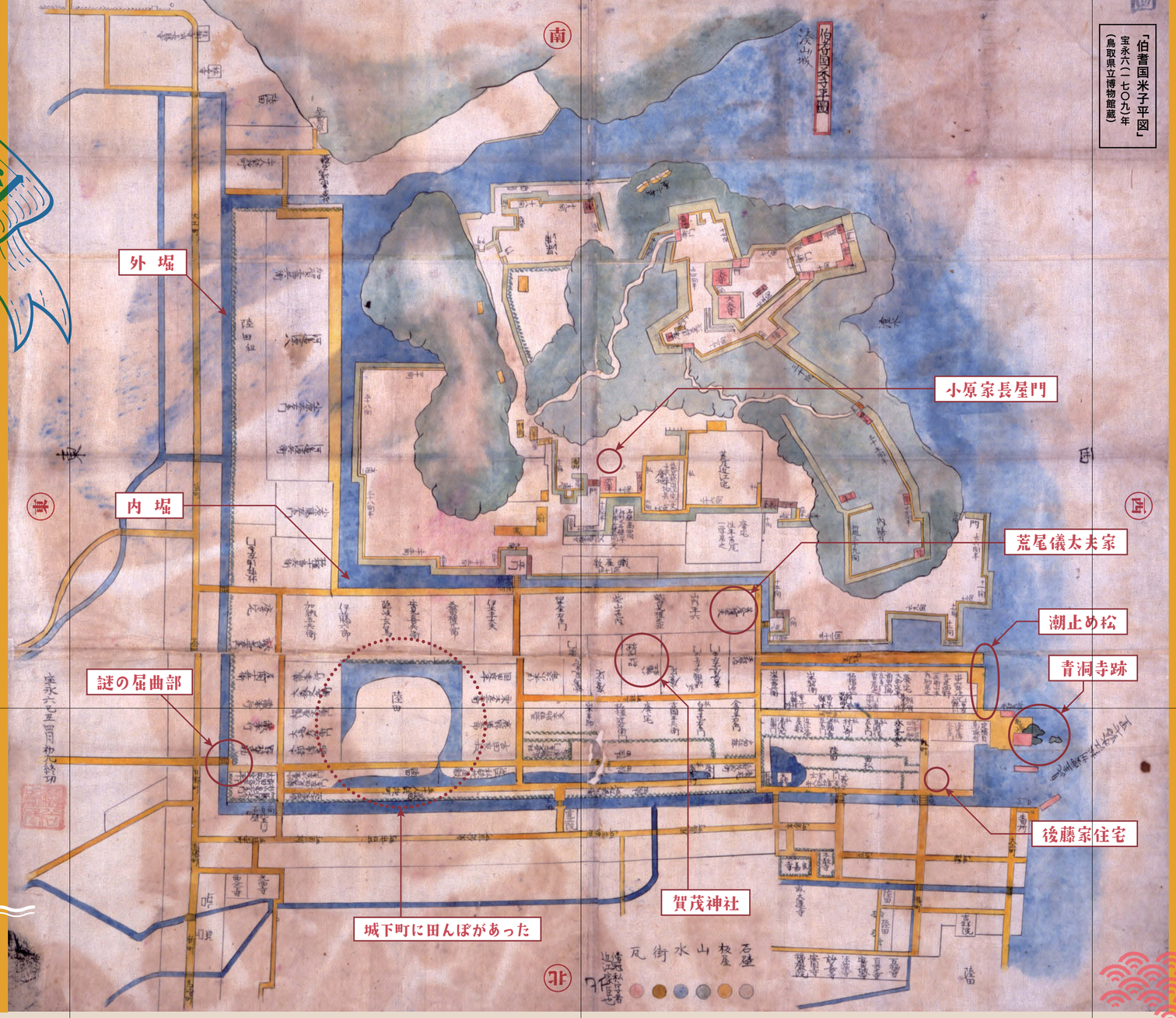
米子城下町絵図

米子城に関する絵図はたくさん残されていますが、江戸時代の城下町の詳細を描いた絵図は数が少なく、これまでに８点ほどしか確認されていません。江戸時代の米子城下町絵図は、武家屋敷の南側に位置する米子城を上に置き、城下の町割りの表現も簡略化されています。このため、現在の地図とは寸法が一致しませんが、住宅地図のように居住者の人名を記載することが目的で描かれたものかも知れません。また、江戸時代前期に描かれた絵図は残っておらず、中村氏や加藤氏の時代に誰がどこに住んでいたのかは分かっていません。

これらの絵図には、かつてあった武家屋敷の範囲や、今は無くなった神社などが描かれていて、当時の様子を探ることが出来ます。



発掘調査地点位置図



『伯耆国米子平図』
宝永六（一七〇九）年
（鳥取県立博物館蔵）

現在も残る城下町の痕跡

現代の米子の街並みと道路は、拡幅されたものもありますが、江戸時代の区画にほぼ一致しています。城下町を区画する外堀と内堀は、大半が埋められて道路になりましたが、その道を歩くことで、城下町の大きさを実感することが出来ます。また、東町の外堀のコーナー部分は、絵図で見ると南側の一部が屈曲していますが、現在もこの屈曲は道路に残されています。

天神橋から見た外堀

外堀の屈曲部

米子城下の怪奇話

江戸時代の米子城下の様子を伝える資料は少ないですが、こんな伝説が残っています。

「あるとき、山内家の孫が夜更けに友達と家に帰る途中、荒尾儀太夫家の前を通りかかると、後ろから「（提灯の）火を消せ」という声がする、振り返ると腹の出た白髪の大きな人のようなものが立っている。恐ろしくなった二人は大慌てで家に逃げ帰り、門の扉を閉めた所で気を失った。あとで門を見ると、爪で引っ掻いたような痕が残っていた。」

この話は、幕末に米子詰の鳥取藩士であった山内東園がまとめた「米府鬼話」という書物に出てくる米子城下を舞台にした怪奇話です。荒尾儀太夫家は、内堀沿いにありましたが、江戸時代には、夜は人通りも無く、妖怪が出そうな雰囲気だったのかもしれません。

荒尾儀太夫家の跡地付近

見どころ解説

①賀茂神社と名水井戸

賀茂神社は江戸時代の絵図にも描かれている神社で、米子の地名の起こりにも関わる場所です。昔、粟島村の長者の子が賀茂神社の隣屋敷に住み、八十八歳になってようやく子供ができ、後にその子孫が繁栄したことから、「八十八の子」にちなんで「米子」という地名が出来た説や、賀茂神社の境内に「よなぐ（ご）井」という井戸があったからという説があります。

この境内の井戸は、米子の三名水に挙げられており、夏にはこの井戸の水を売り歩いていたと言われています。

②小原家長屋門

長屋門とは、家臣などを住まわせた長屋の一部を門として利用した建物のことで、米子城二の丸にある長屋門は、かつて城下にあった小原家の長屋門を移築したものです。江戸時代の武家屋敷の建物として、市内で唯一現存するものです。しかし、小原家では身分に過ぎると家老からおとがめをうけ、この門を使用できなかったという話が残されています。

③潮止め松と青洞寺跡

鳥取大学医学部附属病院の構内に残る松並木で、米子城の築城期に海岸浸食を防ぐために植えられた松だと言われています。また、湊山公園の池のそばにある大岩は、青洞寺岩と呼ばれ、吉川広家が米子城を築城する際に、ここを埋め立てて富田城からの資材を運んだと言われています。その後、中村氏の後に米子城主となった加藤貞泰がここに寺を創建しました。現代でも大岩のそばに加藤貞泰の父と、加藤貞泰の後に米子城主となった池田由之の父母の五輪塔が三基並んで建てられています。

④内町と後藤家住宅

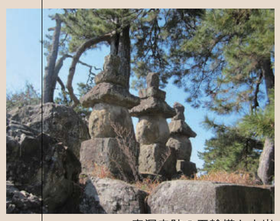
潮止め松から京橋へ向う通りが内町です。内町は江戸時代には武家屋敷の中に商家が立ち並ぶ場所でした。京橋のたもとにある国指定重要文化財の後藤家住宅は江戸時代中期に建てられたもので、後藤家は江戸時代には廻船問屋として栄えていました。個人住宅のため、内部を見学することはできませんが、現在でも外観から江戸時代の商家のたたずまいを感じることが出来ます。

賀茂神社

賀茂神社の井戸

小原家長屋門

潮止め松


青洞寺跡の五輪塔と大岩

内町通り

後藤家住宅